

# ダニエル書 - 第107番

預言の物語：ヤロブアムからヨシヤまでといにしえの道の回復

Jeff Pippenger

2024-02-29

1844年、アメリカ合衆国のプロテスタントはミラー派運動から離脱し、預言上「バビロンの娘」としての立場を取った。これは、北の十部族がユダの南王国から分離したときにヤロブアムが偽りの礼拝制度を打ち立てたことに象徴されている。ヤロブアムの二つの金の子牛、すなわち一つはベテル（「神の家」＝教会）に、もう一つはダン（「裁き」＝国家）に置かれたものは、アメリカ合衆国を特徴づける教会と国家の偽りの体制を象徴していた。ヤロブアムの教会と国家の偽りの体制のあらゆる要素は、アロンの反逆において示されたまったく同じ構造を範にとっていた。ゆえに、ヤロブアムの偽りの礼拝制度は、アロンの偽りの礼拝制度の写しであった。

ヤロブアムの偽りの制度は、プロテスタントが第一の天使の運動から離れ、教皇制のローマという獣の像、すなわちその娘となったときに堅持した礼拝制度を表していた。ヤロブアムの偽りの制度がまさに打ち立てられたその時、ユダから来たひとりの預言者が、その祭壇と偽りの礼拝制度に立ち向かった。1844年、ローマの娘と表される礼拝制度を背教的プロテスタントが打ち立て始めたそのまさに初めに、ミラー派は信仰によって天の聖所の至聖所に入り、安息日を認め、それによって、ローマの権威のしるしである日曜日礼拝の遵守を続けることを選んだローマの娘たちに対する預言的な叱責となった。

ヤロブアムに対峙したユダの預言者は、その場でただちに預言を告げた。

彼は主の言葉によって祭壇に向かって叫び、言った。「祭壇よ、祭壇よ。主はこう仰せられる。見よ、ダビデの家にヨシヤという名の子が生まれる。彼はあなたの上で香をたいている高き所の祭司たちを、あなたの上でいけにえとしてささげ、また人の骨をあなたの上で焼く。」その同じ日に、彼はしるしを示して言った。「これが主が語られたしるしである。見よ、祭壇は裂け、その上にある灰はこぼれ出る。」列王記上 13:2、3。

預言には「祭壇」という語の繰り返しが含まれていた。預言における語句の繰り返しは第二の天使のメッセージの象徴を示し、それによって、第二の天使が到来し、プロテスタントイズムが倒れてバビロンの娘となった1844年を指し示す。同時に、その預言者は、1844年のミラー派が安息日のしるしを認めたのと同様に、しるしを示した。続く節でヤロブアムが預言者を脅したとき、彼の手は麻痺し、これは額か手に強制されるバビロンの刻印を暗示し、それを受けると人は霊的に永遠に麻痺させられることを示している。

本研究の目的上、私たちは、預言者が次のように述べた予言を検討している。「ダビデの家に一人の子が生まれ、その名はヨシヤという。彼は、あなたの上で香をたく高き所の祭司たちを、あなたの上でささげ、人の骨もあなたの上で焼かれるであろう。」ヨシヤは「神の基礎」を意味し、ヤロブアムが偽の礼拝制度を樹立した出来事に象徴される、まさにその歴史の中で築かれたアドベンチズムの基礎を表している。ヤロブアムによって樹立

された偽の礼拝制度に対して、ヨシヤはその偽りの礼拝を先導した祭司たちを罰するのである。

預言者は、ヤロブアムの即位式に行くために通ってきた道に戻ってはならず、またベテルで食べたり飲んだりしてはならないという主の命令に背いた。彼がベテルの偽預言者の食物を食べたとき、彼は、1863年の反逆によって表された背教的プロテスタンティズムの教義と偽りの預言的方法論へと1844年以後に戻ってそれを食することを選ぶ者たちにもたらされる死の象徴として示された。1863年に反逆した者たちの死の床は、ベテルの偽預言者と同じ死の床となるだろう。背教的プロテスタンティズムの死の床は、1840年8月1日から1844年に至る歴史であった。その時、かつて神に選ばれた民であった彼らは見ごされ、ローマの娘たちとなった。ラオデキア的アドベンチズムの死の床もまた、1840年にそうしたのと同様に2001年9月11日に強き天使が降りた日と、間もなく来る日曜法を表す大地震の時との間にあるだろう。

2001年9月11日、十四万四千人の封印が始まり、天使は、地（アメリカ合衆国）と教会（ラオデキア的アドベンチズム）で行われている忌むべきことのために嘆き、叫ぶ者たちの額に印を付けるため、エルサレム中を巡り始めた。2001年9月11日、エゼキエルの四つの忌むべきことによって表される父祖の罪は、そのとき始まった封印の過程において、試金石となる現代の真理となった。

1863年の試みは、1863年に退けられていたレビ記26章の「七つの時」によって表されるミラー派運動の土台に関わるものであった。その試みは、後の雨にある安息を見いだすために、エレミヤの古き道へ立ち返る意思があるか否かに関わっていた。1888年の試みは、ジョーンズ長老とワグナー長老によってもたらされたラオデキアの教会へのメッセージであり、それはまた信仰による義認のメッセージでもあった。

1856年、ラオデキアへのメッセージが初めてミラー派の運動に到来し、それは「七つの時」という増し加えられた光とともにもたらされた。しかし、ラオデキアへのメッセージにおける治療薬に象徴される経験も、預言的歴史というメッセージも、1863年に退けられた。その経験は「『姿』の幻 (mareh)」によって表され、また「(chazon) 『預言的歴史』の幻」もあり、いずれも退けられた。これら二つの幻は1844年10月22日に成就していたが、十九年後とともに退けられた。なぜなら、イエスはいつも終わりを初めと結び付けておられるからである。

2001年9月11日、1863年と1888年における反逆の試練は、再び試金石の真理となった。というのも、それらはどちらもエレミヤが語る古い道に結びついていたからである。その日に後の雨のメッセージが到来し、1919年の試練もまた到来した。というのも、1919年には、預言的な関連性をいっさい欠くキリストの偽りの福音が、偽の「平和と安全」のメッセージとして掲げられたからである。2001年9月11日に黙示録18章の力の強い御使いが降りてきたとき、1節から3節が成就し、そして1節から3節は「第一の声」のメッセージを表している。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ていますか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、こ

の地を激しく揺り動かされるとき、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひとと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

黙示録18章の天使の到来とともに、後の雨が降り始め、ハバクク書2章に表されている「予言的論争」が始まった。その論争は、聖書予言の理解に関する二つの方法論と、偽りの後の雨のメッセージか真の後の雨のメッセージかをめぐるのであった。その論争は、黙示録18章の「第二の声」が到来して、現代のバビロンに対する神の執行的な裁きの始まりを示し、神の他の羊にバビロンから出てくるよう呼びかけるときに終わる。第二の聲の到来は、十四万四千人の封印の歴史の終わりを画する。これは第四の忌むべきことによって表されており、さらにそれは、間もなく到来する日曜法のもとで太陽にひれ伏す、ラオデキア的アドベンチズムの第四にして最後の世代を表している。

天使の降臨と1844年の閉ざされた戸との間にあった背教的プロテスタント主義の死に床は、天使の降臨と間もなく制定される日曜法の閉ざされた戸との間にあるラオデキア的アドベンチズムの死に床を型どっていた。ユダから来た預言者はベテルの偽りの預言者と同じ墓に葬られ、ヨシヤ王が改革を開始したとき、彼はまさにその墓の前に立った。「神の土台」を意味する名を持つヨシヤ王の改革は、2001年9月11日に、神が終わりの日の民を土台へと立ち返らせ始めたときに始まった。彼の改革は、神殿の回復の業に着手したときにすでに始まっていた。

そしてヨシヤ王の治世第十八年に、王は、書記官であるアザリヤの子、メシュラムの子シャファンを主の宮に遣わして言った。「大祭司ヒルキヤのもとに上り、主の宮にもたらされた銀、すなわち門を守る者たちが民から集めた銀の総額を計算させよ。そしてそれを、主の宮を監督する工事の者たちの手に渡させ、さらに彼らに、主の宮で働く工事の人々にそれを渡させて、宮の破れを修理させよ。すなわち大工、建築する者、石工に与え、宮を修理するために材木と切り石を買わせよ。」しかし、彼らの手に渡した金については、彼らに精算を求めなかった。彼らが誠実に事を行っていたからである。大祭司ヒルキヤは書記官シャファンに言った。「私は主の宮で律法の書を見つけた。」そしてヒルキヤはその書をシャファンに渡し、彼はそれを読んだ。書記官シャファンは王のもとに来て復命し、こう言った。「しもべたちは宮で見つかった金を集め、それを主の宮を監督して工事を行う者たちの手に渡しました。」また書記官シャファンは王に告げて言った。「祭司ヒルキヤが私に一卷の書を渡しました。」そしてシャファンはそれを王の前で読んだ。王が律法の書のことばを聞いたとき、衣を裂いた。王は祭司ヒルキヤと、シャファンの子アヒカム、ミカヤの子アクボル、書記官シャファン、王の家臣アサヤに命じて言った。「行って、見つかったこの書のことばについて、私のため、民のため、ユダのすべての者のために主に伺いを立てよ。私たちに向かって燃え上がっている主の怒りは大きい。私たちの先祖がこの書のことばに

聞き従わず、私たちについて書かれているすべてのことにしたがって行わなかったからである。」列王記下 22:3-13

ヨシヤという名の子が生まれるという預言は、力ある御使いが降臨し、終わりの時の民を昔の道へと連れ戻した2001年9月11日を指し示している。その降臨は、1840年8月11日に同じ御使いが降りたことによって予表されていた。これら二つの降臨はいずれも、イスラムに関する預言の成就を示した。ヨハネの黙示録9章15節に見いだされるイスラムに関する時の預言の成就を、前もって特定し、その事前の予告を公にしたことと名が結び付けられている歴史的人物は、ヨシヤであった。

黙示録10章および18章における天使の二度の降臨の双方で、「ジョサイア」という名が示されている。ジョサイア・リッチは、1840年8月11日に成就したイスラムに関するメッセージを提示した。そして2001年9月11日には、ヤロブアムの歴史において不従順な預言者によって示されていた「ジョサイアという名の子の誕生」の預言が、天使が神の終末の民を、不従順な預言者とヤロブアムの対決がその成就を見た土台となる歴史へと導き戻す中で、ラオデキア的アドベンティズムにおいて成就した。聖書の証言は、来るべきジョサイアに関する予告を示しており、不従順な預言者によって型取られた歴史が1844年に繰り返されたとき、その名に関する彼の予告は再び預言の物語の中に位置づけられた。

2001年9月11日、ユダ族の獅子は、ご自分の終末の民をエレミヤのいにしへの道へと導き戻された。それは、契約の使者が1844年10月22日に突然来られるその神殿を建て上げてこられた四十六年間を表していた。ヨシヤは神殿の修復の働きを始めたとき、モーセの呪いを発見した。十四万四千人の働きは、イザヤによって回復の働きとして表されている。

彼らは昔の荒れ跡を建て直し、いにしへの荒廃を復興し、代々荒れすたれていた町々を再建する。イザヤ書 61:4

神殿を修理し回復したヨシヤの働きは、イザヤが神の終わりの日の民によって成し遂げられると示した働きである。なぜなら、すべての預言者は、自分たちが生きた時代よりも終わりの日について多く語っているからである。その働きは、エズラの時代にバビロンから帰還した人々によっても予表されていた。

なぜなら、私たちは奴隷であった。しかし、私たちの神は、私たちが奴隷の身にある間も私たちを見捨てず、ペルシアの王たちの前で私たちに憐れみを及ぼし、私たちを回復させ、私たちの神の家を建て直し、その荒廃を修復し、さらにユダとエルサレムにおいて私たちに城壁を与えてくださったからである。エズラ記 9:9。

エズラによって進められた働きは、彼らがバビロンから出て来たときに成し遂げられた。そしてそれは、ヨシヤが行っていた神殿の回復の働きを表し、また、イザヤが神の終末の民について示した働きでもあり、その働きは2001年9月11日に始まった。黙示録においても、ヨハネはその働きを示している。

そして、私が天から聞いたその声が再び私に語って言った。「行って、海と地の上に立っている天使の手に開かれている小さな巻物を取りなさい。」私は天使のところへ行き、彼に言った。「その小さな巻物をください。」すると彼は私に言った。「取って食べよ。腹には苦くなるが、口には蜜のように甘いだろう。」私は天使の手からその小

さな巻物を受け取り、食べた。するとそれは私の口では蜜のように甘かったが、食べ終わるやいなや、腹は苦くなった。彼はまた私に言った。「あなたは多くの民、国々、言語、王たちの前で、もう一度預言しなければならない。」 また、杖のような葦のさおが私に与えられ、天使が立って言った。「立ち上がり、神の神殿と祭壇、そしてその中で礼拝する者たちを測れ。ただし、神殿の外庭は除いて、測ってはならない。そこは異邦人に与えられているからであり、彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるだろう。私は自分の二人の証人に權威を与える。彼らは荒布をまとして、千二百六十日の間、預言するであろう。」 黙示録 10:8-11:3

この箇所ではヨハネは、1840年8月11日に天使が降りたとき、その手にあったメッセージを食べ、さらに1844年10月22日の苦い失望も味わったミラー派を表している。1844年の苦い失望の只中に立って、ヨハネは、終わりの時代の神の民の象徴として、1840年から1844年にかけて示された経験を繰り返さなければならないと告げられた。こうしてそれは、2001年9月11日と、間もなく到来する日曜法を指し示している。彼は「あなたは多くの民、国民、言語、王たちの前で、もう一度預言しなければならない」と言われたが、これは、黙示録18章で天使が降りるとき、黙示録10章の歴史が「行に行を重ねて」繰り返され、全世界が照らされることを表している。

神の終末の民が再び預言するときに繰り返されることになる歴史を特定することに関連して、ヨハネは「立って神の神殿を測れ」と告げられた。彼の「測ること」は具体的に定められていた。というのも、彼は1844年という年、すなわち10月22日の失望によって腹が苦くなったところに置かれていたからである。彼は神殿を測るよう命じられたが、庭は除外するようと言われた。その庭は異邦人の時を表し、彼らが1260年の間その庭を踏みにじるのだと知らされた。その1260年は1798年に終わった。ヨハネは1798年から測り始め、それ以前の1260年、すなわち霊的な神殿と霊的なエルサレムが踏みにじられていた時代は除外することになっていた。彼は1844年の失望の地点に立っていたので、1798年から1844年までは46年である。その46年が神殿を表している。

ヨハネ、すなわち神の終末の民が、1840年から1844年に行ったように再び預言すべきとき、その開始は、イスラムに関する預言が成就して天使が降りてきたときであった。彼らが再び預言する働きには、神殿を測るという働きが求められ、その働きは「古き道筋」の調査を表していた。「古き道筋」とは「神殿」によって表される歴史のことで、1798年の「終わりの時」に始まり、1844年の大失望で終わった。彼らが、エレミヤのいう「古き道筋」、すなわちヨハネの「四十六年の宮」を調査する働きを始めると、神殿全体に散らばった瓦礫の中にモーセの呪いが見いだされ、やがて来るヨシヤに関する予告が成就した。ヨシヤの働きは、イザヤによっても改めて示されている：

あなたの中の者は、昔からの荒れ跡を建て直し、代々の基を築き直す。あなたは「破れを繕う者、道を直して住めるようにする者」と呼ばれる。イザヤ書 58:12

神の終末の民は、「住むべき道」を回復すべきであり、それはエレミヤの「古き道」である。彼らは、ヨシヤやエズラの歴史における働き人たちが成し遂げていたように、古い荒れ跡を建て直すべきであった。彼らは「line upon line」という方法論を用いるべきであった。というのも、彼らは、四十六年の宮によって表されているアドベンチズムの土台の歴史を単に「立て上げる」だけではなく、そのことによって「多くの世代の土台を立

て上げる」ことになるからである。彼らは、すべての改革運動が土台となる働きを表していること、また「line upon line」によって1798年から1844年に至る終末時代の土台が特定されることを認識すべきであった。彼らは「破れ」を修理すべきであり、この「破れ」とは、器や壁に生じる最初の裂け目で、それがさらなる災厄への道を開くことを表している。修理されるべきその「破れ」とは、1863年の反逆であった。

2001年9月11日にヨシヤが到来したとき、神の終末の民はエレミヤの昔からの道に立ち返り、ミラー派の歴史を測り始めた。彼らは「破れ口」を発見した。彼らは「昔の荒れ跡」を築きながら、ミラーの夢に出てくる宝石の真理を見出した。彼らは、ヨシヤがそうしたように、「七つの時」を発見し、レビ記二十六章の真理を回復し、それによって「昔の荒廢」を立て直した。レビ記二十六章の「最初」と「最後」の荒廢を回復したとき、彼らは、一方が1798年に、もう一方が1844年に終わっていることを認識した。こうして彼らが昔の荒廢を立て直す働きこそが、ヨハネに与えられて神殿を測ることを可能にした、まさにその「杖」であった。

ユダ族の獅子は、その民を古い道に立ち返らせ、彼らが後の雨のメッセージを見いだせるようにされた。そしてその後の雨のメッセージとは、第三の災いにおけるイスラムのメッセージである。彼らがついに、1843年と1850年の先駆者の図表により表されているハバククの二つの聖なる板を見いだしたとき、彼らは、土台には黙示録8章の「三つの災い」が含まれており、ミラー派の神殿が建てられた土台となる歴史の中で第二の災いが終結していたことを見た。彼らはさらに、預言の三重適用則の理解が、彼らがエレミヤの古い道に立ち返ったときに「安息と潤い」を認識できるよう、先にユダ族の獅子によって備えられていたことを認識した。その「安息と潤い」とは、第一と第二の災いという二つの証人によって識別され、確立される、第三の災いの後の雨のメッセージである。

次の記事でこの研究を続けます。

敵は、この終わりの時に立つ民を備える働きから、私たちの兄弟姉妹の心をそらそうとしている。彼の詭弁は、この時の危険と務めから人々の心を遠ざけるように仕組まれている。彼らは、キリストが天から来て、ヨハネにご自分の民のために与えられた光を、取るに足らないものと見なしている。彼らは、私たちの目の前に迫る出来事は特別な注意を払うほど重要ではないと教える。彼らは天来の真理を無効にし、神の民からこれまでの経験を奪い、その代わりに偽りの科学を与えている。

「主はこう言われる。道に立って見よ、昔からの道を尋ね、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。」エレミヤ書6章16節

誰も、私たちの信仰の土台——私たちの働きの初めに、御言葉を祈り深く学び、啓示によって据えられた土台——を引きはがそうとしてはならない。私たちはこの土台の上に、この五十年の間、築き上げてきた。人は、新しい道を見だし、すでに据えられているものよりも強固な土台を据えることができると考えるかもしれない。しかし、これは大いなる欺瞞である。すでに据えられているもの以外の土台を、人は据えることができない。

過去に多くの人々が、新しい信仰の構築や新しい原理の確立に着手してきた。だが、彼らの築いたものはどれほど長く持ちこたえただろうか。ほどなく倒れた。岩の上に据

えられていなかったからである。

初代の弟子たちも、人々の言葉に直面しなければならなかったではないか。彼らは偽りの理論に耳を傾け、そのうえで、すべてを成し終えて、こう言って堅く立たなければならなかったのではないか。「人はだれも、すでに据えられているもの以外の土台を据えることはできない」。第一コリント 3:11

「それゆえ、私たちは最初の確信を終わりまで堅く保たなければならない。力ある言葉が、神とキリストによってこの民に送られ、彼らを世から、一つひとつの点で、現在の真理の澄んだ光の中へと導き出してきた。聖なる火に触れられた唇をもって、神のしもべたちはそのメッセージを宣べ伝えてきた。神の御告げは、宣べ伝えられた真理の真正さにその印を押してきた。」『Testimonies』第8巻、296、297頁。